

〈論文〉

誰が話を聴くのか？ ——被災地における霊の話と宗教者——

高橋 原

2012年度から東北大学大学院文学研究科に設置された実践宗教学寄附講座では、臨床宗教師（公共的空間で人々の心のケアを行なう宗教者）の養成に着手している。その中で常に考えていることは、被災地等で支援活動を行なっているさまざまな専門職とは異なる、宗教者にしかできない貢献とは何だろうか、ということである。宗教者ならではの心のケアとはいかなるものであり得るのか。そのようなことを考える手がかりとして、本稿では、被災地の「幽霊」の問題を考えたい。「幽霊に取り憑かれた」といった悩みが相談として寄せられた時に、宗教者はどのように対応しているのか。事例とアンケート調査に寄せられた回答を紹介しながら考察する¹⁾。

1. 東北大学実践宗教学寄附講座と臨床宗教師

東日本大震災を契機に、宗教の公共性、社会資源としての宗教といったテーマが脚光を浴びている²⁾。これはひとつには、被災者の避難場所や支援の拠点として寺院や教会等が有効に機能したことや、地域文化の中で親しまれてきた神社が人々の心のよりどころとなっているといった観点によるものである。また一方では、「宗教者」を活用すべき社会資源であると考えられる観点がある。救いを求める声があるときに、損得勘定を抜きにしてすぐにも駆けつけて支えの手を差し伸べることが自分の使命であると考えている宗教者達が現に存在している。彼らがありがた迷惑な存在とならずに、真に人々のニーズにふさわしい貢献を行なうためには何が必要なのか。臨床宗教師の養成もそのような発想をひとつの出発点としている。

東日本大震災以来、被災地に入った僧侶らによる傾聴活動が一定の評価を得てきたことはよく知られている。たとえば、栗原市曹洞宗大通大寺の金田諱

応住職が主催している傾聴移動喫茶「カフェ・デ・モンク」は、2011年5月から、2013年12月までのあいだに120回を数えている³⁾。しかし、「復興」が進んだと言われるようになって、人の出入りが少なく、支援が行届いてこなかった小規模な仮設住宅の中には、睡眠薬等の常用者が多いところもあるという。金田師は、震災から二年以上を経ても、心の支援はまだまだこれからだと語る。

医師、看護師、社会福祉士、保健師、臨床心理士、ボランティア、自治体の担当職員等々さまざまな職種の人々が被災者の支援活動を行なっている。自分が相手を救いたいという宗教者の使命感は貴重なものであるが、異なる職種の支援者同士の連携の中でこそ、それが有効に発揮されるであろう。仮設住宅などの公共的な場所では、僧侶が自分の寺の檀家を相手にしている時とは異なる、いわば「アウェイ」の環境に相応しい行動が求められる。「布教お断り」という言葉に集約されるような宗教者への警戒感に配慮し、異なる宗教宗派の信仰を持っている人や、そもそも信仰を持たない人が心のケアの対象者になっているのだと自覚しなければならない。



図1 被災者を取り巻く支援の輪

性急に自分が属する宗教の教義に基づいた救済観、世界観、死生観を振りかざすのではなく、相手が何を感じ、何を求めているのかを慎重に受け止め、そのうえで必要とあらば、相手の求めに応じて、自分が身につけてきた宗教の流儀に基づいた対応をするべきである。これを換言すれば、まずは「傾聴」の態度が必要であり、必要に応じてスピリチュアルケア、さらには宗教的ケアを提供すべきである。

る、ということになる⁴⁾。

しかし振り返ってみれば、檀家、氏子、教会員など自宗派の信仰を持つ人々に向かい合う時であっても状況は変わらず、原理的には同じことが求められているのではないだろうか。無難に教義を語っていると思われる場面で

あっても、それを語る宗教者と、聞いている信者の側には理解のレベルの差があり、もちろんひとりひとり異なる生活史や直面している状況によっても受け止め方が変わってくる。たとえば葬儀の時に遺族から来世や死後の行き先について問われ、教義に基づいてすらすらと説明できたとしても、相手はその説明を求めて質問したのではなく、もっと別のことが気にかかっているのかもしれない。権威に守られた聖職者の立場に立って、固定的な人間関係の中でのコミュニケーションに安住していると、相手の本当の声が聞こえてこない。信者の側でも、和尚さん、牧師さんの前ではこんなこと言わない方がいいと話題を選んでいることもある。

臨床宗教師の研修で講義、グループワークや実習を通じて宗教者の方々に学んでいただいているのはこのようなことである。決して信仰や価値観を押し付けることなく、相手のニーズに寄り添うことの必要性を、布教スタイルに慣れてきた宗教者にあらためて考えてもらうのである。2013年度までに行われた四回の研修には、さまざまな宗教宗派に所属するのべ57人の宗教者が参加し、修了証を受け取った。

2. 被災地の「幽霊」と宗教者の対応

上述のような、心のケアにおける宗教者の役割にまつわる問題点を鮮明に浮かび上がらせるのが、被災地の「幽霊」の問題ではないだろうか。たとえば、被災者が身体の不調を感じた時には医師に相談し、薬の処方を受ける。人間関係や生活資金の問題があればソーシャルワーカー等に相談する。さまざまな心の問題の相談相手としてはカウンセラーが存在する。仮に、「幽霊が出た」「幽霊に取り憑かれた」といった「心霊現象」にまつわる悩みが生じた場合、これを相談する相手は誰であろうか。そのような「非科学的」な、また人聞きの悪い話ができるのは、やはり宗教者しかない、ということになるのではないだろうか。そして、宗教者は、自分が

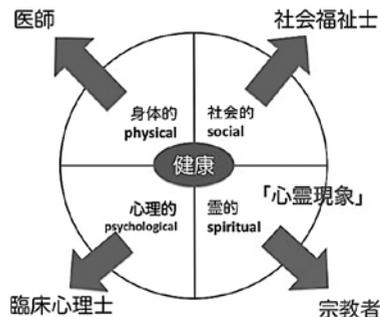


図2 誰を相談相手に選ぶのか・・・？

身につけてきた各宗教の流儀に従ってこれに対処しているに違いない。

しかし、そもそも幽霊などというものが存在するのだろうか。さまざまな問題や葛藤を抱える被災者の無意識的な不安が投影されて、「幽霊」として体験されているのではないだろうか。だとしたら、宗教者に求められるのは、ただちに「幽霊」を相手にすることではなく、まずは相手が抱えている問題とは何なのかを慎重に見定め、傾聴に徹することなのではないだろうか。そのような問題意識を念頭に、被災地で実際に起こっていることに目を向けてみる。

新聞などで、被災地に幽霊が現われていると報じられたことがある⁵⁾。記事から読み取れることは、お化けや幽霊が本当に存在するかどうかはさておき、そのような体験を訴える人がいるが、行政などが対応するわけにもいかず、宗教者がそれに対応しているということである。このような状況について、宮城県名取市で在宅緩和ケアに携わってきた故・岡部健医師は次のように語っている。

今、被災地だと霊的ケアができる人は宗教者しかいません。特に地域をよく知った宗教者。地域のお寺さんに幽霊が来たと言っても別段不思議なことではなく、まだそのへんにいて、おまえらのことが心配なんではないのか、お経をあげるから心配するな、と言い切れるのは宗教者しかないですね。⁶⁾

しかし、必ずしもお寺がこうした問題の対応窓口として開かれているというわけではない。筆者の見聞の範囲でも、そもそも幽霊の話題を出すこと自体が遺族感情を害すると憤慨する宗教者もいた。これは、幽霊の存在を認めることは、仏教的観点からすれば、浮かべられない死者が成仏できずにさ迷っていることを認めることになるからである。また、僧侶の務めが檀家から出た死者をきちんと弔い、成仏させることであるとするならば、幽霊が存在することは僧侶が果たすべき役割を果たしていないということにもなってしまうのである。

その一方で、会いたくてたまらない故人が幽霊として現われてくれたという話もあるようで、2013年8月23日放送のNHKスペシャル「亡き人との再会」では、そのような何人かの体験が紹介された⁷⁾。このような体験

は、概して、亡くなった家族が天国から見守ってくれているというメッセージを伴い、体験者に安心感を与えるものであるので、宗教者に「悩み」として相談されることは少ない。

このようにして、幽霊目撃譚などのいわゆる「心霊現象」の体験は、宗教者しか相談する相手がいないとも言えるが、特定の霊魂感を前提とする場合、宗教者だからこそ相談しにくいという一面があることになる。後述するアンケート調査に対して、幽霊が出るなどという話は聞いた事がないと断言する被災地の僧侶からの回答もあったが、これは「心霊現象」の体験が存在しないということよりはむしろ、そのような体験をしても、否定的な態度をとる宗教者には相談しにくいということを示唆しているのではないだろうか。そうすると、「幽霊」の悩みは、誰にも話すことのできず抱え込まれてしまうことになるが、これは心のケアという観点からは好ましくないと言えるだろう。

3. なぜ「幽霊」を見るのか

さて、幽霊を目撃したとか、死者の霊に取り憑かれたといった体験を報告する人は一定数存在する。それが、霊界や死者の霊といったものの実在を反映しているのであれば、(ある意味で) 事態は単純なのだが、ここではそのような実在論に依拠することはせず、人間の心理の問題として考察を進めたい。差し当たり考えているのは、「幽霊」は、様々な不安やストレスの現われであるということである。亡くなった人々への言うに言われぬ思い——あれをしてあげたかった、これをしてあげられなかった、故人が亡くなったのは自分のせいだ、といったいわゆる「サバイバーズ・ギルト (survivor's guilt)」——が、生活再建の不安や人間関係のストレス、心身の不調、等々と交じり合っ、死者の霊魂という観念に親しんできた文化の中で表現を与えられたのが、「幽霊」であるということである

この説を裏付けるかのように、たとえばある僧侶が語ったところによると、霊の相談をもちかけてくる人は、家族間の問題を抱えていることが多いという。また被災地で生じたという次のような「憑依」の事例も、「心霊現象」が世俗的なストレスと強く結びついていることをうかがわせるものである。

亡き父の霊が娘に憑依した事例⁸⁾

津波で亡くなった男性の葬儀の際に、故人の娘が、突然憑依状態になった。親族に呼ばれた曹洞宗某寺の住職が行ってみると、たしかに娘が白目をむいており、声をかけても返事がなく、うわごとのように「悔しい、悔しい」と呟いている。その声はまさしく住職が生前から知っていた故人のものであった。住職が咄嗟に、数珠を娘の頭に置き、不動真言を唱えて印を切ったところ、娘は正気に戻った。娘は何事もなかったように葬儀に出て、その後はもと通りに生活している。この葬儀の喪主は、本来なら遺された長男が務めるはずであったが、長いあいだ付き合いの絶えていた親族が喪主を務めることを強硬に主張し、遺族はそれを意に反して受入れることとなっていた。喪主を誰が務めるかは、遺族に支払われる災害弔慰金の配分に大きな影響を与える問題であった⁹⁾。

この例からは、故人の霊が娘に憑依し、その口を借りて語った「悔しい、悔しい」という言葉の背後には、経済的利害や複雑な人間関係に由来する問題が潜んでいたことが推測できる。また興味深いのは、曹洞宗では（あるいはその住職は）普段不動真言を唱えることはないにもかかわらず、咄嗟にこれを思いついたということである。そして、記憶を辿ってみると、これは生前に託宣をおろして占いのようなことをしていた住職の母がいつも唱えていたもので、住職も子供時代に熱が出た時など、いつもそれで治してもらっていたのだという。この地域では、かつてはこのような女性宗教者の存在は珍しいものではなく、お寺の和尚さんによる葬儀が終わった後に、他所からオカミサンと呼ばれる、多くは盲目の女性が呼ばれて来て、死者の口寄せをすることが習わしであった¹⁰⁾。すなわちこの場合、その地域の宗教文化の中で、死者が生者の口を借りて思いを伝えるという習慣が伝えられてきており、故人の娘はさまざまな思いを「憑依」という形に凝縮して表現したのだと考えられる。

津波の被災地特有の事情もある。たとえば石巻市の沿岸部は人の交通が盛んな地域であり、津波の犠牲者の中には、地元住民以外の人々が多く含まれるという。したがって、沿岸部に暮らす人々は、多くの見ず知らずの人の遺体を目にするようになった。そして、とりわけ家族が行方不明となった人々

は、家族を探しての遺体安置所巡りをしなければならなかった。これは、家族の安否も不明なまま、冷たい床に並べられた遺体ひとりひとりの面影と向かい合うことを意味する。不安と絶望の中、数多くの遺体の面影を突きつけられ、それぞれの境遇や最期に思いを馳せ、自分の家族への思いを重ね合わせるといふ経験は、簡単に想像できるようなものではないが、このような経験をしたら幽霊くらい見ることがあっても不思議はないだろうと思わせる。

4. 被災地の「心霊現象」の調査から

おおよそ以上のような見通しをもって、筆者は2013年度から、「心霊現象」について相談が寄せられた場合に、被災地の宗教者達がどのように対応しているのかを調べる調査に着手した¹¹⁾。これは、宮城県内全域の寺院・教会・神社宗教施設約1400箇所¹²⁾に所属する宗教者を対象とした郵送によるアンケート調査と、それを踏まえたインタビュー調査によって行うものであり、一般の被災者は調査対象としていない。以下ではアンケート調査への回答とインタビューによる聴き取り内容について、考察を交えながら紹介する。

21項目の質問の中には、「東日本大震災後、噂話としてではなく、自分で「霊的な現象」あるいは「不思議な現象」を体験したという方と会ったことがありますか。」という問いが含まれている。これに対して回答を寄せた276人のうち69人（約四分の一）の宗教者が、肯定的な回答をしている。この数字を多いと見るか少ないと見るかには検討の余地があるが、マスコミ等のメディアによって、興味本位の幽霊目撃譚が流布されているということにとどまらず、そのような体験をしている人々がある程度存在するということを裏付けるものとなっている。

そして、69人のうち、50人が、いわゆる「霊的な現象・体験」についての相談を受けることがあると回答しているので、いわゆる「心霊現象」の悩みに応じる役割を担う存在として宗教者があてにされていることは確かである。もちろん、これらの数字を逆に解釈すれば、そのような体験をする人には出会ったことがなく、相談も受けないという回答の方が多いわけであるが、本稿の観点では、それは霊の問題に対応してくれる宗教者、あるいは普段から何でも話ができる相手として存在している宗教者でなければ、相談相

手として選ばれないということを示唆している。

東日本大震災後、噂話としてではなく、自分で「霊的な現象」あるいは「不思議な現象」を体験したという方と会ったことがありますか。(回答 276)	
はい：69	いいえ・無回答：207



いわゆる「霊的な現象・体験」についての相談を受けることがありますか。(上記で「はい」と回答した 69 名)	
はい：50	いいえ・無回答：19

相談される内容には、「幽霊」のようなものを目撃したり、夢に現われるといった体験をして不安感や体調不良を訴えるものが多いようである。姿形は見えなくとも、霊のようなものに取り憑かれたと感じるケースもある。不安感や体調不良をなぜ霊的な原因によるものであると考えるのか。自分で漠然とそう感じるのがまず最初にあるのだろうが、「拝み屋さん」と呼ばれる民間宗教者が介在していることが多いようである。不安を感じることがあるとまず拝み屋さんのところに行き、見てもらう。そして、霊の問題が原因であるという見立てとともに、「お寺さんで供養してもらいなさい」あるいは「神社でお祓いしてもらいなさい」といった指示を受けて、僧侶や神主のもとを訪れるのである。このようにして地域の中で宗教者の役割分担がうまく機能しているように思われるが、僧侶の側では拝み屋を快く思っていない場合も多く、その存在を正確に把握しているわけでもない。僧侶のもとを訪れる相談者も、それが拝み屋さんの指示であることを簡単には明かさない。よくよく尋ねてみると、実は拝み屋さんに言われて来たことがわかったケースが多いようである。僧侶は、拝み屋の言うように死者が祟るということはないと言い聞かせ、読経をし、死者の供養をする。

このような悩みの相談が、震災後にはっきりと増加したと考えている宗教者はそれほど多くないが、震災後半年ないしは一年くらいの時期に相談が増えたと感じるという回答が散見された。その理由として、震災直後の慌ただしい生活が落ち着いて、喪失と向き合うことができるようになったからではないかという指摘があった。これは、この問題が被災者の生活状況と密接な関係をもっていることを意味し、宗教者による支援活動のありかたにとって有益な示唆となっているように思われる。

一般的に、大規模災害の支援の展開として「モノから心へ」という流れが

あると思われるが、「心霊現象」の悩みの相談数が一定の期間を経てから増加したという指摘も、この観方に符合している。被災地が衣食住の確保に奔走している時期に「心のケア」の看板を出しても相手にされなかったという話も聞いたことがあるが、それは「心のケア」が不要であるということではなく、初期にはモノを介したつながりによってそれがなされているということだろう。続いて、「心のケア」の専門家が現場に入り、宗教者もそこに加わっていく。宗教者は対象を「心」に特化した働きかけをするわけでもなく、「モノ」の支援をしないわけでもない。そして後述のように、「症状の解消」ではなく、ケア対象者との全人的な関わり合いの中で、生活世界を支える価値観、世界観をとともに回復し、QOL（生活の質）を高めるという創造的プロセスに関わっていく存在となる。その意味でも、心のケアということにおいては、宗教者は震災の直後よりもむしろ復興と生活再建の時期に大きな役割を担い得るといえるのではないだろうか。「心霊現象」についての相談が震災後半年以上を経てから増加するというのはこのことを示唆している。

今回調査を始めてみて興味深かったことの 하나가、「あなたの所属する宗教・宗派・教派では「霊的な現象・体験」をどのように考えていますか」という問いに対する答えである。ここで「霊的」と言っているのは、幽霊などのいわゆる心霊現象を広く指しているのだが、「宗派では特に決まっていない」というタイプの回答が非常に多かった。すなわち、素人考えで、宗教者は霊の問題の「プロ」なので、この種の問題を相談にいけば何らかの決まった処方箋が用意されていると思ってしまうがちであるが、現実はそうではないということである。

では実際に相談があった時にどのように対応しているのかということ、仏教僧侶の場合、師から学び、身につけてきた方法によって、というのがごく一般的な回答となるようである。師というのは、多くの場合は実の父親であり、したがって、幼少時から無意識的に吸収してきた地域の文化的背景や、固有のしきたりなどとともに、見様見まねで「自然に」身につけた対応というものがある。もちろん、僧侶になるまでには本山で修行し、教学を修め、またさまざまな社会経験も積んでいるだろう。こういったものすべてを引くくめて、いわば宗教者としての勘を頼りに、相手に応じて適切であると考えられる対応がなされている。

このような書き方をすると、個々の僧侶が無手勝流で事に当たっているという心もとない印象を与えるかもしれないが、これは上述の「傾聴」と「スピリチュアルケア」という観点からすると、むしろアドヴァンテージにもなり得る。というのは、「心霊現象」が、宗教的・霊的領域以外の、心理・社会・身体的領域の原因に由来するものであるとするならば、宗派ごとにあらかじめ定められた見方や方法がないほうがかえって、相手の訴えに虚心に耳を傾け、「心霊現象」の背後にある諸問題について思いを巡らせるという態度に開かれているからである。「霊が憑いている」と言われて、即座に、「では除霊をしましょう」「お祓いをしましょう」というのでは、相手が何を抱えて自分のもとを訪れたのか、その人の気持ちに寄り添って傾聴するということになりにくいのではないか。また逆に、「そんなものは気の迷いです」と一蹴することももちろん、この観点からは好ましくないだろう。

ただし、このような理屈は一種の理想論であって、上述の拝み屋さんの紹介でやってくる相談者への対応（祟りなどないと説明し、死者供養をする）においては一定のパターンが繰り返されていると考えられるし、僧侶が行なうことは結局のところ読経による死者供養である。そしてそこにはおのずと宗派ごとのカラーというものが現れてくる。

次に掲げる表は、先の「あなたの所属する宗教・宗派・教派では「霊的な現象・体験」をどのように考えていますか」という問いに対する回答の一部を宗派別に抜き出したものである。引用は断片的なものであり、詳細な分析は今後の課題であるが、短い言葉の中にも案外と宗教・宗派の特徴が見てとれるので紹介し、ごく簡単に印象を述べる。もちろんここに掲げた以外の宗派からの回答もあったが、紙幅の都合で今回は省略する。

【浄土宗】

- ・認めていない。 ・否定。 ・否定しております。
- ・基本的には「ない」と考えております。
- ・浄土教なので密教あるいは霊的な考えはない。 ・否定も肯定もしない。
- ・否定はしませんが、不可思議な現象は起こり得るものだから受け容れます。しかし必要以上に忌避すべきではなく、当該の方々の気持ちが安らぐまで、阿弥陀様を念じ、救いとして頂くよう、念仏をただひたすら称える。

【浄土真宗】

- ・宗派では理解できないことととらえています。
- ・現実にはありえないことで、妄想の現象だと思う。

誰が話を聴くのか？

- ・常識では理解できないような現象・体験はある。しかし霊や魂ではない。
- ・迷信的なものとしてとらえ積極的には対応しようとはしない（私自身は踏み込んで対応しようとしている。）
- ・この世でいのちを終えると阿弥陀仏の救済により、浄土で仏になることが決まっている。よって「霊」という概念はほとんどない。
- ・“迷信”の類いは否定したい立場だと思います。私達の宗派では“他力”で、“念仏”をとさえれば即成仏できる楽々宗派で、即浄土へ行けるというモノです。

【曹洞宗】

- ・各自の判断　　・あるともないとも言えない。
- ・宗派としての指針はないと思う。　　・あつて当然のことであるが、そのことにこだわる必要はない。
- ・教義の中に霊的なものに関する事案はありません。除霊、お祓いというお勤めもありません。現在に生きている方以外は全て「ご先祖様」という位置づけになります。
- ・霊の問題には介入しない。否定も肯定もしない。
- ・あるような、ないような、はっきりと否定はしていない。
- ・宗教は霊的現象を否定・肯定もせず、今を生き切る事が教義の主張。
- ・霊的な現象は当然起きて当たり前。ほとんどの人は何も感じないで生活展開があるが、深い悩み、心が落ち着きを失くしている時に霊的な現象が現われやすいと思う。
- ・科学的に説明できない事象にとらわれてはいけなない。人間は生きている限り悩み苦しむ者である。悩みや苦しみは心の問題であるから心を落ち着け生活することが大事。
- ・ありえない話ではないが、恐がることはない。

【神道】

- ・特に統一した見解は聞いたことがありません。　　・個々に任せている。
- ・万物には命が有り、霊が有る。それに対して「礼」を欠いた事により様々な事が起こる。霊に対して「礼」を欠かない事、共存共栄の精神を持つ事が大切。
- ・靈感の強い人の特殊な体験。　　・自分で考えなければならない。　　・自然現象。
- ・現世と幽世があり、その中に靈魂が存在すると考えている（それゆえに、呼びかけ、祈り、感謝があると考える。）
- ・宗教として考え方が決まっているわけではない。

【キリスト教】

- ・ここの設問の霊的と捉え方が違うので答えられない。
- ・キリスト教で言う「霊的な体験」とは、自分のありのままの姿に神の助けによって気づかされることであつて、この設問で問われているところのオカルト的な現象のことではありません。一方で、日本の文化の中で育った私たちにオカルト的な現象理解があることも事実であり、それはそれとして受け止めて、個別にいてねいに対応する必要があると思います。
- ・幽霊を恐れる必要はない。神の霊（聖霊）は常に働かれていますので、人間が

自覚することもあるが、これも恐怖の対象ではない。

- ・霊的な体験をさせて頂くことは感謝です。神と人との繋がり人と人との繋がりを確信し天国がある事を確信するからです。それは希望となり希望は今を生きる力になるからです。
- ・「霊的な現象・体験」を否定することはない。そういった事象を知覚できることは神からの賜物であると考え。ただし、それが特別な異能力であるとも考えない（権威化しない）。あくまで、人の能力の一部で、常に解釈を求めると捉えている。
- ・かなり慎重に扱います。完全否定ではありませんが、聞いているケースでは、非常に個別性が特徴で、普遍的でない。

浄土宗、浄土真宗では、言葉で理解されている教義の立場から、オカルト的な意味での霊の存在を端的に否定する回答が目立った。とりわけ、死とともに阿弥陀の力によりただちに浄土に向かう（往生即成仏）という浄土真宗の考え方が、さ迷う死者の霊という「迷信」的観念と両立しないことは理解しやすい。

宮城県最大の宗派である曹洞宗からの回答の典型的なものは、あるともないとも言えないが、そんなことは驚くに当たらず、気にしても仕方がないというタイプのものであった。理屈はさておき、まず座禅をせよ（只管打坐）という修行を経た僧侶達の心構えのようなものが感じられる。死後の成仏ではなく、生き様が重視されているとも言えるだろうか。

「神道」としてまとめたのは基本的には神社本庁に所属する宮司達からの回答である。ここでも、いわゆる「心霊現象」にどう対応するかが教義として決められているわけではないという回答が目立ったが、一方で霊の世界に強い確信を持ち、万物に霊（みたま）、神が宿っているのは質問されるまでもなく当然のことでことであるという態度が見てとれる。

「キリスト教」としてまとめたものは、プロテスタントの牧師の立場からのものである。今回の質問紙調査が全宗教、全宗派に対して一律に行なわれたために、やむを得ないことであったが、多分に民俗仏教的な風味を持った「心霊現象」という観念に対する違和感が表明され、聖書の記述に基づいた回答が散見された。すなわち、「神の霊」「聖霊」、また逆に「悪霊」を念頭に置いて書かれた回答である。したがって、いわゆる「幽霊」などには基本的に否定的な態度であるが、そのような訴えに丁寧に対応している方々も多い。

以上、短いコメントとともに印象を述べたが、全体として、教義の立場は意

識しつつも、仮に「心霊現象」についての訴えがあった場合には、教義の立場にこだわるのではなく、丁寧に対応すべきであるという考え方を表明する宗教者が多かった。もちろん、そうでなければそもそも相談に訪れる人がいないということが推測されるのだが。

5. いかに対応すべきか

以上のことから、「心霊現象」への対応に関する実践的な提言をひとことで言えば、「心霊現象」は何らかの不安を中心とする複合的な要因による現象であるという観点に立ち、それを頭ごなしに否定するのではなく、いわば「自然な」ものとして、心のケア、グリーフケアの手がかりとして受け止めるということである。

「自然な」というのは、たとえばキューブラ＝ロスの業績によって人口に膾炙することになった「臨死体験」や、岡部健医師らが調査¹³⁾を行なった「お迎え現象」などのように、「あの世」「死後の世界」が存在するかどうかは判断の外において、そのような体験をすること自体は古来知られたことで、人間の心の働きの一つとして理解可能なのだという態度をとることである。多くの人がそのようなオープンな態度をとることによって、誰にも打ち明けられない悩みが抱え込まれたままになるということが少なくなり、また靈感商法などカルト団体による被害を避けることにもつながるだろう。

ただし、「霊」に市民権を与えすぎて逆に、そのような「悪徳宗教者」の発言に説得力を持たせることになるのではないかという懸念にも十分に耳を傾けなければならない。そこに、公共性をもった存在として信頼される宗教者のあり方、「臨床宗教師」のような理念が議論される意味がある。繰り返し強調されなければならないのは、布教とは一線を画し、まず傾聴、ということである。宗教者には、自らの拠って立つ教義をまず脇において、ひたすら相手に寄り添う態度が求められる場面がある¹⁴⁾。しかし、「傾聴」ばかりを強調しすぎると、他の心理カウンセラー等とは異なる宗教者の存在意義が不明確になるという面もある。「幽霊」についての相談を持ちかけられて、教義の正確な理解に基づいてはつきりとした説明と処方箋を与えてくれる宗教者の存在がありがたいということは確かにあるだろう。また、即座に「そんなものは気のせいだ」と言い切ってくれるからこそ、菩提寺の和尚さんを

頼りにして話に行くということもあるだろう。

教義の立場を堅持しつつ、「公共的」に振る舞うというのは、難しい課題でもある。しかし、たとえば、浄土真宗本願寺派の金澤豊師は、よく金縛りにあうので除霊してくれないかという依頼があることについて、「僕らは除霊をするわけではないです。金縛りとか幽霊とかを経験している人が、経験したり、見たりして、どう思い、何を感じているかということに注目します。まずは、不思議なことを経験している方の話をしっかりと聞きたいと思えます」と述べ、「お釈迦様だったら、どう答えたでしょうか」「親鸞さまだったら、どんな対応をされたでしょうか」と自問自答するという¹⁵⁾。このような態度は宗教者による傾聴のあり方の一つの理想像として参考になるものである。

また、拝み屋さんの指図で訪れた依頼者に対して、死者（あるいは先祖）の供養を行なうという多くの僧侶の対応の仕方は、地域文化の中でこの問題を受け止める宗教者の役割について示唆に富んでいる。このようなケースは、多くは住職と檀家の関係の中で生じることが多いと思われるが、実際には、何も話を聞かずに儀式だけ行なうということは起こりにくいだろう。そして、僧侶は教義的な立場からも、実践的経験からも、実在する死者の霊が悪い影響を与えているとは考えずに、亡くなった人に対する供養を行なう。そうすることが相手に安心感を与えると知っているからである。このような宗教的ケアが成立するのは、依頼者と僧侶がともに、ご先祖様が見守ってくれているおかげで安泰に生きていけるという民俗仏教的世界観を共有しているからである。そこでは、「浮かばれない死者」が供養儀礼によって「安らかな死者」に転化され、もとの平和な世界の秩序が回復される¹⁶⁾。

このような場合、上掲の図2の図式で言えば、宗教者は、依頼者の訴えが非宗教的次元に由来する不安によって引き起こされていることを薄々感じながら、そのような原因を特定しようとする「アセスメント」は行なわず、宗教的訴えを宗教的なものとして受け止めて対処する。これがたとえば医師であれば、「症状」の身体的基盤を突き止めて、薬を処方し、その症状の解消を目指すところであろう。それぞれの支援専門職は、自分の専門領域に応じて、問題を引き起こしている原因の特定を行なって問題の解決を目指す。

ここに、宗教者と他の専門職との、微妙であるが、大きな違いがある。宗教者は専門家であるように見えて、専門家ではない。あるいは、専門家であ

るといふことの意味が、宗教者においては他の職種とは異なっている。宗教あるいは霊という領域は、対象者を分析的に特定次元に還元して扱うことをゆるさず、全人的に向かい合うこと、しかも文化的背景、価値観を背負ったものとして対象者を扱うことを要求する。「心霊現象」という「症状」に対して供養をもって対応する時に、そこで目指されるのは「症状の解消」にとどまるわけにはいかない。「症状」が消えた後に、どのような世界に対象者を返してあげるのか、というところまで視野に入れて行なわれるのが宗教的ケアの重要な特質であり、それが宗教者の役割なのだと考えられる。

以上のような主張は、霊は実在せず、「心霊現象」は他の世俗的要因に還元できるという主張を暗黙に含んでいるので、心霊的世界の実在を真剣に考える宗教者からは批判されるであろう。また、医師などの専門職の職分の理解も一面的であり、全人的に支援対象者に向き合っている支援者の仕事を理解していないと叱られるかもしれない。またそもそも宗教に対して批判的な合理的立場からすれば、供養だお祓いだといって心霊現象を真に受けることは、問題の「本当」の原因から目を背けさせる欺瞞に他ならないということになるだろう。

だが、ご先祖様を大切に生きてきた人々と文化が存在し、その中で、仏教者による心のケアが有効に働いているという現状がある。20年後、30年後に、「無宗教」であり、「ゼロ葬」をよしとする現在の若い世代が人口の大半を占めるようになっても、このような宗教的ケアに対するニーズがあるのかどうかはわからない。しかし、宗教的世界の中に生きている人々があり、苦難に直面する人々のために尽くそうという宗教者達が社会の中に存在している現在、それを有効に活かし、ケアの質を高めることはできないか。そのように本稿の主張を確認して結びとする。

※本稿は科学研究費補助金「東北被災地域における心霊体験の語りと宗教者による対応に関する宗教学的的研究」(挑戦的萌芽研究、課題番号:25580012、研究代表者:高橋原、2013～2015年度)の成果の一部である。調査にご協力いただいた宮城県の宗教者の方々に感謝申し上げます。

注

- 1) この問題については以下の拙稿でも論じた。「臨床宗教師の可能性—被災地における心霊現象の問題をめぐる」『現代宗教 2013』国際宗教研究所、2013年、188-208頁。「論・談 被災地の「心霊現象」」『中外日報』2013年8月24日。
- 2) たとえば明石書店より、叢書《宗教とソーシャルキャピタル》全四巻（2012-2013）（『アジアの宗教とソーシャルキャピタル』『地域社会を作る宗教』『ケアとしての宗教』『震災復興と宗教』）が出版されている。
- 3) 「心の相談室」のホームページに掲載されている「リアル：Café de Monkの軌跡」による。<http://www.sal.tohoku.ac.jp/kokoro/diary.cgi?field=7>
- 4) スピリチュアルケアと宗教的ケアはともに目に見えない世界との関わりを大切にするものであるが、前者においては援助者がケア対象者の世界に入っていく、対象者自らの中にある答えへの気づきを促すというアプローチをとる。一方で、宗教的ケアにおいては、問題に対する答を持っていると期待されている宗教者の世界の側に、ケア対象者を引き入れることになる。したがって、特定の宗教的世界観や価値観をある程度認めあったところに成立する。次を参照。谷山洋三「スピリチュアルケアと宗教的ケアの相違」『ケア従事者のための死生学』ヌーヴェルヒロカワ、2010年。
- 5) 「お化けや幽霊見える 心の傷深い被災者 宗教界が相談室」『産経新聞』2012年1月18日。
- 6) 岡部健「一人ひとりの魂をおもい、そして看取る」『あけぼの』2012年11月。
- 7) 次の記事も参照。「切ない思い、姿を変えて 「相思相愛だから現れる」 幽霊目撃談、被災地で」『朝日新聞』2012年11月19日夕刊。
- 8) 筆者の聴き取りによる。
- 9) 喪主の立場と災害弔慰金の配分の関係には法的規定があるわけではない。親族間の力関係や、葬儀の運営にまつわる慣習の中で両者が結びつけられていたと思われる。
- 10) 佐々木宏幹「私の研究遍歴」『東北民俗』44、2010年。
- 11) 科学研究費助成「東北被災地域における心霊体験の語りと宗教者による対応に関する宗教学的的研究」（挑戦的萌芽研究、課題番号：25580012、研究代表者：高橋原、2013～2015年度）
- 12) 概数で仏教寺院 950、キリスト教会 150、神社 250、諸教 50。
- 13) 相澤出・田代志門・藤本稔彦・諸岡了介・照井隆広・岡部健『2011（平成 23）年実施在宅ホスピス遺族調査報告書』（科学研究費補助金報告書、課題番号：22530548）。奥野修司『看取り先生の遺言』文藝春秋、2012年。
- 14) 鈴木岩弓「いまなぜ臨床宗教師の養成が必要なのか」『寺門興隆』176号、2013年。
- 15) 藤丸智雄『ボランティア僧侶』同文館出版、2013年、105-110頁。

誰が話を聴くのか？

16) 池上良正『死者の救済史』角川書店、2003年、20頁。

Who Listens to Their Stories?

How Religious Professionals are Dealing with Occult Phenomena in the Great East Japan Earthquake Disaster Area

by Hara TAKAHASHI

In this paper, the author provides an overview of how religious professionals (i.e. Buddhist monks, Christian pastors, etc.) are dealing with so-called occult phenomena in the tsunami stricken areas after the Great East Japan Earthquake. Most of the ghost tales seem to result from a variety of unconscious anxieties but there are no professional support workers available for people to consult with about them other than religious people, especially Buddhist monks. Furthermore, even these religious people do not necessarily have any particular prescription that has been prepared by their sect or denomination to deal with such tales. However, this could be an advantage for them from the viewpoint of spiritual care, because it makes it possible for them to listen in an open and frank manner, and with an unbiased view to these stories.

The main characteristics of the care provided by such religious professionals is that they aim not only at removing troubling symptoms as medical doctors do, but also aim for creating a better quality of life for people by restoring their views of life and the world. The experts do this through conducting religious ceremonies intended to bring peace to the restless souls of the dead. Even if they believe that the “true” cause of occult phenomena is some secular anxiety, they deal with these phenomena as religious or spiritual issues instead of reducing them to secular matters to be resolved by secular means. This is why religious people can take a unique role among caregivers and it is of importance to reconsider the role of the religious professionals as social capital.